

●大関昇進の決まった関取が、受諾の意思を伝えたときに用いた座右の銘が「正々堂々」。ケレン味のない、その相撲っプリに相応しい「人」が、使うべき「時」に、使うべき「場所」で簡潔かつ明瞭に使ったこの表現は、違和感なくストンと腑に落ちる、**久しぶりに聴く清々しい言葉**ではなかったかと思えます。その一方、特にそれを敏感に感じてしまったと云う事は、私共を取り巻く環境に歪みが生じてしまった為かも知れず、だとすればその原因が何処にあるのかと思考を巡らせて行くと、否応なくその**対極にあるとさえ云い得る、此の処の当局側の発言**に辿り着いてしまうのです。見苦しいまでの逃げ口上やその居直りぶりは、力士の用いた四字熟語に倣って言えば差し詰め「**馬耳東風**」「**厚顔無恥**」「**問答無用**」に「**牽強付会**」といった処でしょうか。●「**ならぬことはならぬものです**」で知られる、会津藩士が守り続けた教え=私達が、個々の家庭や学校教育の中で教え諭されて来た**取るべき言動・取ってはならない言動**に通じる価値観=が、国民の代表を嘯く輩によって、悉くゴミの様に軽視され無視されてゆく有様は、最早秩序崩壊というしか無いのかと思える程です。戦後民主主義が作り上げて来た秩序=社会制度や法令による制約、それに基づく慣習や主張と云う民主的、合理的、経験的判断の蓄積=に基づく**社会規範**は、誤魔化してハグラかし、口を拭いて白を切り、握り潰して口裏を合わせる生々しい中継シーンによって平手打ちを食い、やがて、足元を見透かし弱みに付け込み、槍玉に挙げて逆ねじを食わせ、臭い物に蓋をして見て見ぬフリをする—という、この上なく不正義・不道德な言行とされてきたタブーを為政者自らが演じ、正当化し、ゴリ押しすら憚らない、そういう「**権力を笠に着る者の実態**」が曝け出されるにつれ、止めを刺されたのだと思えます。つまり、一連の政権スキャンダルは、結果的に**戦後の社会規範そのものを公開処刑してしまったに等しい**のです。そしてそれは又、独裁体制の歪・権力の一極集中の弊害がいみじくも白日の下に晒された瞬間でもあったのです。●実際、政権(官邸)側が、反対派を封じ込める切り札としてやたらにチラつかせる「**抵抗勢力**」「**岩盤規制**」という文言も、場面毎に使い分けられており、今回のケースでは、どうやら文科省=**官僚機構=を敵対勢力の梁山泊と見立てている節がある**という事も判って参りました。実証実験的な制度という建前を最大限使い、議会制民主主義の根幹となる審議もろくに行わず、当然法制定プロセスもスルーし、恣意的に指定したエリアで在来規制を解除して、事実上の一国二制度を機能させ、それを足場に全国展開を図る—。この仕組みを使い、昵懇にしている一部の業者に便宜を図ろうと画策するも役人の正論に阻まれ、筋書きがバレてしまった—と云うのが真相ではないでしょうか。●これに対し、働き方改革実現プロジェクトの方は、犠牲者(過重労働)の存在が追い風になった事は否めない処でしょう。背後に財界が控える政権の**真の狙いが、正社員・長期雇用システムの破壊とそれによる労働コスト圧縮、並びに法改正に基づく強制的賃上げ=中小事業者が結局ツケを払う=による成長政策実現**にあったとしても、正面切って反対し難い空気があるからです。●論理より情動に左右され易い国民性、未だに是は是、非は非と云えない企業体質—等、根本的な課題は幾つかありますが、差し当たって懸念されるのは、31年4月を境に制度化が一気に進むと予想される同一労働同一賃金が齎す**社内トラブルの増加**です。無用な紛争やロスタイム、ロスマネーを避ける為にも、だからこそホンの少し時間を割き、社員の声に耳を傾ける事が尚一層重要になって来るのです。

